戦中戦後の生活

◆飯田　正雄（72歳）

私は昭和六年三月に笄小学校を卒業し、府立一中を経て陸軍士官学校へ入学し、昭和十三年末に同校を卒業して、翌十四年春新しく編成された第三十六師団の山砲兵連隊の小隊長として、約三ケ年にわたり山西省南方晋南地区で蒋介石の率いる中国軍並びに中共軍と数次にわたる戦闘に参加しました。

この地区は内地の気候に似ていますが、雨が少なく時折り吹き荒れる強風に舞い上がる黄塵（おうじん）には大いに悩まされたものです。地形は大行山脈を中心とし、日本アルプスを連想させるような山々が連綿として続き行軍に難渋を極め、多数の軍馬を伴う夜行軍の連続で大変苦労したものです。大行作戦（昭和十六年六月）では日本軍六箇師団で敵の数軍団を包囲し、これを黄河北岸地区でせん滅し、軍司令官より数々の感状を受けました。この作戦では彼我入り乱れ混戦となり、敵の軍司令官以下、多数の捕虜を得ましたがわが軍の被害も大きかったと思います。

このように戦争は参加する人々に極限の行動力を要求し、作戦に参加する人員には飛びかう砲火により多数の戦傷死者が発生します。近代戦の様相は戦力の増大に伴いますます苛酷の度を加えるようになったので、戦争による被害は加速度的に増大することが予想されますので国際間の紛争や戦争は万全を尽くして防止しなければならないと思います。

私は昭和十七年三月末内地の学校へ入校のため帰国しました。兄は慶応医科を卒業後、海軍士官として従軍中、昭和十二年二月戦病死しました。父は日露戦争では新任少尉として参加し乃木将軍の傘下に入り旅順攻略に参加しましたが、日支事変では第一〇師団野戦病院長として中支の戦闘に参加し、軍医としては珍しい金鶏勲章（くんしょう）も拝受しました。母は一人留守を守り、婦人会役員として、この地区の出征兵士の世話を続けました。昭和十八年には永年住み馴れた笄町三九番地から強制疎開により霞町一番地（現在地）へ移転しました。父が医師を開業していましたので他の地区への疎開ができなかったためです。私は勤務地の関係で荻窪に住んでいましたが三月十日の空襲で家内の実家（市ヶ谷）が焼失し一家

六人を収容しました。それからの生活は大変苦しいもので妻の両親の心痛はいかばかりかと思います。

五月二十六日の空襲は霞町地区を直撃し、我が家も母や看護婦がバケツリレーに協力し、隣家でさしもの猛火を阻止することに成功しました。この地区の二百戸が焼失を免れることができたのにはこの防火活動が大いに貢献し得たものと思われます。またもし強制疎開が無かったら笄町の疎開跡地にはナパーム弾が多数落下したので全滅していただろうと胸をなでたものです。

追記

前述の三十六師団は、昭和十八年ニューギニア戦線に転進し、質量に優れた米国軍の攻撃によりその大半を失い、終戦後生還した戦友は十分の一位であり、大半の方は戦死または戦病死されました。なお当連隊には前区会議員として種々の分野で長年にわたり活躍された宮入俊光先生が小、中隊長として従軍し苦労を共にされました。先生は鞆絵小学校より正則中学を経て大学を卒業後直ちに当部隊に派遣され山西の戦闘に参加され赫々（かくかく）たる武勲を立てられました。なお戦後は山麓会（三十六連隊に因んで）東京支部を宮入宅（猿寺）におき毎年供養をしていただきました。

衣料切符

（港区教育史資料）

職場も戦場

（港区教育史資料）

食べものがなくて毎日並んだあの頃

◇池田愛子（82歳）

私たち家族は、芝区田村町に長く住んでいた。

昭和十六年十二月八日未明、ラジオの臨時ニュースで日本軍が真珠湾で米艦隊を奇襲し、宣戦布告、日米開戦と寝耳に水の放送で、国民皆おどろいた。それが皮切りで太平洋戦争が始まり、「毎日敵艦撃沈、南方方面の島々を占領した」ニュースで、最初は勝ちいくさで国民は有頂天になっていた。

町内会では提灯行列をしたり、戦車を作ってねり歩いたりしてよろこんでいた。国中が戦時体制に入り、愛国婦人会、国防婦人会、隣組ができて銃後の守りに一生懸命活躍した。主人は幸い召集をまぬがれ、カーテン屋なので議事堂の暗幕を縫ったり、軍事工場の暗幕を縫ったりして東京は黒一色になった。

そのうち学徒出陣で、町内の大学生も召集された。近所のご主人も赤紙がきて大勢の子供を残して出征した。また何千何百人の若い兵士が真夜中に戦地に送り出されていった。私も見送りにいった時、武運長久を祈り無事帰還されることを祈ってやまなかった。私の弟も三人召集され二人は中国、千島、末の弟は中学三年生で予科練に入り戦地に行った。気丈な母の気持ちはいかばかりと思った。十九年に近所のご主人が英霊となって帰ってきた。子供が大勢いるのにと悲しかった。

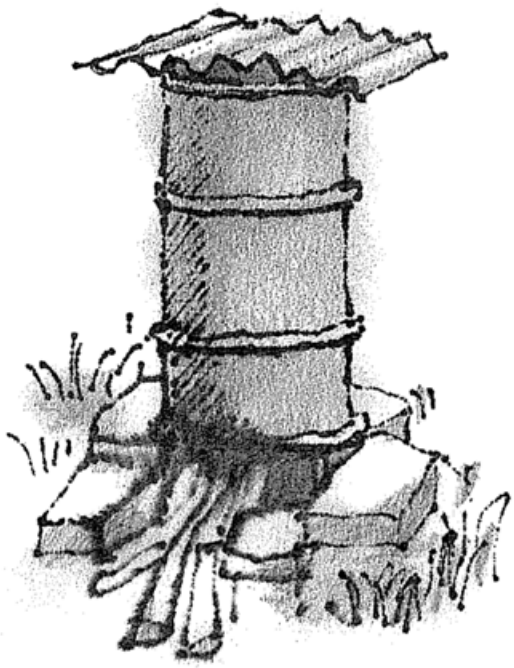
物資が統制されてなんでも配給制になり、私も赤ん坊を背負って隣組の家々に物資を配って歩いた。鉄の物はみんな供出させられ、出さなければ非国民だと言われた。十九年頃東京はだんだん空襲がはげしくなってきた。二十年三月十日は忘れもしない未明の大空襲で本所、深川にはB29大編隊で焼夷弾が投下され壊滅状態になった。主人の弟の妻子三人も猿江小学校の講堂で凄惨な死をとげた。心配していた弟も一ケ月ぐらいたってから手足に火傷をしてやっと尋ねてきて主人と抱き合って泣いていた。

空襲が激しくなったので学童疎開が始まった。次男は栃木県鬼怒川へ、長女も保母になって一緒に疎開した。残る四人の子供と主人と私たちは食糧難にあえぎながら麻布のそば屋で雑炊を売ると聞けば、乳のみ子にも一人分もらえるので一

人背負って小さな子の手を引いて並んだ。菓子パン二ツ「一人分」朝六時に売ると聞けば子供を起こして並んだ。それでも到底足りず警察に応急米をなんども貰いに行って叱られたこともあった。そのうち強制疎開で田村町から新橋六丁目に移った。芝病院の並びの水道が断水してしまい、バケツ一杯の水を御成門の先までもらいに行ったり、赤れんが通りのマンホールまで水を汲みにいったり、焼けてしまったお米屋さんで焼米をくれると言うので並んだこともあった。

四月、五月にかけて芝方面に昼夜の別もなく連日B29の大編隊で夜は照明弾が投下される。昼間のように明るくなったところに焼夷弾が投下される。空襲警報が鳴ると赤ん坊を背負い、乳母車に炒米（いりごめ）、水、オムツ、その他必要な物を乗せて桜川小学校の地下室に逃げ込み毎日出たり入ったりして生きた心地もなかった。逃げまどう姿を今でも思い浮かべる。うでにガラスの破片がささった人、手足にけがをした人等が食糧を求めて並んでいる姿も痛々しい。主人も私も東京生まれで疎開先もなかったが、やっと知人のお世話で栃木県鹿沼町の農家の納屋を改造した家を手に入れることが出来た。空襲がはげしくなったので東京をはなれることにした。北千住にいた両親に最後になるかもわからないので、子供を連れてお別れに行った。一泊した夜、空襲があって芝方面に火の手が上がっていると言われ、心配なので早朝に父母の家を出た。電車は上野までしか行かず赤ん坊を背負って上野から歩いて神田、日本橋、京橋を通って来たけれど家々はみな焼けてしまって見るかげもなかった。やっと芝に付いた時は田村町方面は焼野原になっていた。

五月二十六日、あしたはいよいよ疎開するつもりだったが、その夜の大空襲で新橋六丁目も焼けてしまった。荷造りした空のタンスや道具は前側の愛宕署のお巡りさんが出してくれたが中身はみな焼けてしまった。二日目に鹿沼町に疎開した。東京をはなれる悲しさ、身にしみた。



明暗を感じた一日

◆伊奈　修一（52歳）

戦後四十五年、戦争の生々しい記憶もうすらいでくる昨今、私には忘れられない体験がある。それは毎年八月十五日が来ると、鮮やかによみがえる。

当時、父が満鉄勤務であったことから旧満洲で生れ育った私は、終戦の日を大連で迎えた。十歳だった私は、その日ラジオから流れる玉音放送を正装正座で聞いたことを覚えている。午後、いつものように表へ遊びに出かけた。近所の日本人の子供達と石けり、輪投げ、縄飛びなどに熱中し、それを現地の子供達がいつもうらやましそうに遠くから眺めているのを得意がっていた。その日はあまり夢中になっていたためか、ふと気が付くと仲間達は皆帰ってしまったとみえて自分一人になっていた。そろそろ帰ろうと思い自宅の方に向いかけたが、まわりの様子が何かおかしい。よく見ると、今まで離れた所にいた現地の大人・子供十人ぐらいが手に手に棒切れを持って、私をとり囲みじわりじわりと迫って来るではないか。なんの覚えもなかったが、とっさに身の危険を感じこの場から逃れることに集中した。ちょうど、私は学校の塀を背に立っていたので瞬間、身をひるがえしてその塀に飛びつき、二メートルの高さをよじ登り校庭内に飛び降りた。

連中がどっと押し寄せたのとほとんど同時だった。私は夢中で校庭を横切り反対側の塀から市電通りに面した道へ転がり落ちた。民家の裏通りをいくつも曲り必死で走るうち、追って来る声もだんだん遠くなっていった。私は子供心にも走りながら考えた。戦争に負けたんだ戦争に負けたんだと。昨日までは、現地の子供達を無視して、したい放題の遊びをしていた日本の子供達が彼らは憎らしかったのだろうか。お昼のラジオで日本が戦争に負けたことを知ったが、それがどんな意味をもつのか理解するのは無理だった。

無我夢中でたどりついたのは、自宅から二キロメートルほど離れた伯父さんの家だった。その夜は泊めてもらったが、もし、あの時逃げ切れなかったら今頃どうなっていたかと思うと興奮して寝つかれなかった。あとで聞いたところによると、同じようなことが至る所でおきたということである。

この日を境にして、表を出歩く日本人の数は、特に夜半な

どはほとんどいなくなった。子供の私達も、表へ出るのは学校へ行く時ぐらいで、それも身の安全のため中国の保安隊という隊員さんが常時ついていてくれたのである。しかし、半年後には学校も閉鎖され、引き揚げまでの約一年間、家の中に閉じ込もる日が延々と続いた。このことは、帰国後もしばらくの間、逃げ回る夢を見て夜中に目を覚ますことが何度となくあった。たった一日で、のびのびとした生活から逃げ回る生活へと変った。

戦後半世紀近く経た今日ではあるが、毎年、八月十五日が来るたびにこの体験が、強烈によみがえるのである。と同時に、戦争のない国、平和な国がいかに幸福であるかということを、この体験を通して学んだのである。

（港区教育史資料）

わが苦闘　十九歳の記録

◆猪瀬　逸央（63歳）

終戦

青空に浮かんだ白い雲。風一つない新屯公園の山々、樹々の青さ、小鳥の鳴声も蟬の鳴声ともに、じりじりと焼きつく暑さである。白いベッドも汗ばみ病床生活も楽ではない。親もとを離れ早や三年余り、今は撫順新屯保健所で左右肋膜炎療養一年の闘病生活である。日夜、両親の興安総省通遼の街々、満鉄社宅の母の姿を静かに浮かべながら……。

昭和二十年八月十五日、正午の重大ニュースに、医師、看護婦、全患者療養前に全員集合、耳を傾け聞いたのが天皇陛下の終戦の詔勅である。全員無言。ただ茫然とする。ソ連軍の満州国進入とその戦況にはソ連に対する宣戦布告を予期していたのだが……。

当時は戦闘状態に入っているので、病人といえども安閑な生活は許されなかった。微熱苦痛に堪えながら、衣服を着けゲートルを巻き長い棒を手にしてベッドに寝ながらの、日夜通しての戦時態勢であったのだが、その覚悟、その緊張も終戦の勅語の放送により、感情ただ空白空虚である。以来、患者同士の集まり、または新屯青年寮での同志の集りは、日夜論戦を続ける。鉄槍をとり抵抗か、抵抗せずに青酸加里を飲み全員玉砕か、また青年の生命活動は今後にある、故郷への帰国を待つべきだと、過激派と穏健派との対立空気である。

その頃母は腸閉塞の大手術で通遼満鉄病院に入院中で、関東軍が静かに移動を開始していた。終戦の前夜の行動である。その夜、身の危険を感じた満鉄邦人の突然の避難命令、準備急である。一般邦人はまだ知らない。遅れた行動のため悲惨な悲劇が生じたとも聞く。

私の母は手術してまだ三日目、七人家族の、そのうえ母をかかえて、着のみ着のまま裸同然の苦しい父ではある。列車は大虎山に向う。そのあとの通遼は蒙古より開魯のコースをへて戦車隊が迫っていたのだ。後を追うようにソ連空軍の襲撃、そして満人の暴動があった。大虎山に着いても、満鉄社宅に一時退避。その夜、また満人の発砲しながらの暴動襲撃である。満鉄社員家族の群々は駅に向って退避する。

私の家族は手術後の母がいるため、機敏な活動が出来ず、

裏板に身を潜める。隙間より電燈の明り、満人の家探しのため身回り品は奪われ、彼らは乱暴しながら去っていった。時を移さず駅に向った。母を右肩に、病弱の弟を左肩負い、一家を引連れていく父の苦労である。駅に向う途中、逃げ遅れ殺された家族もいたということだ。即時貨車に乗り、錦県に避難しなければならないが、満人の機関手は運転を拒み、中々いうことを聞かない。ようやく納得させ出発する。その時、先刻の満人達大挙発砲しながら近づいてくる。進行する貨車から少数の日本軍はこれに応戦しながら、遠くにわが汽車は走り行く、一路錦県へ。後日、兵隊がいうには、出発が遅れ満人の襲撃に会い、その悲惨を見ないようにするため、爆薬でその場玉砕を覚悟していたと。

ある日父が突然泰天より面会に来る。当時の私は撫順採炭局保安課爆発試験研究所留用技術者で、阿部保安課長の家族の一員として同居の身である。父と一緒に奉天に疎開している母親のもとへ。懐かしく会う。

四、五日ぐらいの休暇であったのだが、奉天市郊外での国民政府軍と八路軍との交戦で、日本人の旅行は禁止されたから、一ケ月も休まなければならなかった。毎日、退屈しながら窓より眺める国際道路には、数十の日本人の死体が荷車で運ばれてゆく。毎日の出来事である。栄養失調のためなのであろう。私たちの家庭では毎日ボロボロの高梁に粗末なおかず、最低の生活である。父は鉄道公司に勤務、姉は支那人の経営するそばやの手伝い、上の姉は家事奉公、八歳の下の妹は朝早く菓子を仕入れては街頭売子、働かなければならなかった。

奉天も撫順と同じく、街中はお祭り騒ぎ、食を、衣を漁るのに混雑する賑やかさだ。撫順行のトラックを見つけ、一ケ月振りで阿部さん宅に帰る。

一般邦人の引き上げが錦県、奉天、撫順と南から順番に開始された。親も引揚げたと思うと焦燥はつのるばかり。とうとうこらえきれず、会社や阿部さんには無断で奉天行の密馬車、満人に金をやり同行、途中撫順市郊外の関所で国民政府軍の調べに会い下車したところが、馬車だけが逃げるように行ってしまった。とり残され通過できないで、ただ茫然。しかし、親に会いたい一心は諦めることは出来ない。二回目は慎重に構え、満人部落にのりこみ、奉天行密炭販売馬車のあることを知った。早速、前金をやり早朝三時半頃出発する事を約束し、明日を楽しみに待った。

いよいよ出発の日がきた。こんどは阿部さんに別れをつげ、北台町の社宅を出る。社宅周囲のバリケードを乗り越え目的地に向う。一時、支那人は歩道に三々五々裸で寝ている。蒸し暑い晩である。目をさまされてはと、跣足(はだし)になりながら馬車夫のもとへ急ぐ。星一つない暗闇である。水しぶきをとばしながら密馬車は運河の岸辺を走る。河を横断、一路奉天へ。途中発見されれば刑に処せられる決死の潜行密馬車である。奉天郊外で国民政府軍に発見されはしたが、マータイ袋の中にかくれ難を逃れた。奉天では石炭不足の為、形式

的に検査を受け難なく通過した。城壁がぐんぐん大きく広がって行くにしたがって、私の胸は踊る。

死線を越えて来た歓喜に小おどりして、玄関の扉を元気一杯あけたが、誰もいない。この家で生活をした当時を思い、涙が走る。死線を越えて来たのに……と、その胸は怒り悲しみ交々(こもごも)の感情で空白、ただ死にたい心境であった。さまよう。国際道路の並木道の芝生に横になる。月が明るく、母の顔が白い雲に浮んでいる。涙がとめどなく流れる。

錦県日僑引揚者事務員が近いうち錦県に帰ることを聞き同行する。若しや、親に会えるかもしれない。一抹の期待をかけた。引揚者の群々の無蓋(むがい)貨車に、昼間はじりじりと焼けつく暑さ、時にはスコール、夜は大陸性気候の寒さが身につく。錦県につくまでに幾多の病人、死者が出た。錦県には、既に親はいなかった。追う。錦西も同じく。最後の頼み、葫蘆島引揚港に向う。しかしここも同じ。引揚げたあとであった。

岸壁に立ち、海の彼方を追い、「お母さん」と声のかぎり呼べど、打寄せる白波は涙に変わるのみ。男泣きに泣くだけ泣いた。もしこの海が地面であれば走って行きたい。無心に引揚船の群々の上をかもめが飛んでいる。永久に満洲の土になることを自棄(やけ)に諦めるせめてもの慰めだ。

こんどは、国民政府軍孫参謀気付検査官の職を得た。日夜、孫参謀室で引揚者の引揚証明書の員数を調べる身、俸給は重役級待遇である。雨といわず、風といわず、毎月数千人、多い時は一万余人の検査である。数列に並べさせ、手荷物一切の調べ（国民政府軍、米軍共同検査）。違反品あれば、全部没収である。検査が終ると引揚船に誘導する。引揚者がここまで来るには言葉では表わせない苦労がある。生命を守って来た彼等の体は痩せ衰え顔は青黒く、眼は窪(くぼ)み虚(うつろ)な視力、その中には乗船を見ずして、毎月十数名の死者も出ている。多数の引揚者は、この悲惨な事故に反応を示す気力がない。ただ自分の生命を支えるのに精一杯である。同胞のため、われわれ一同は子供をいたわるようにして愛情精神をもって迎え送るのだ。

一日の仕事も終り、夜の港も奇麗だ。数十の船の灯が上がったり下がったり揺れる様子は港のリズムである。岸壁に立って、母への思いを味わう。せめての慰めである。

静かに明日がまた待っている。

投票

忘れられぬ私の青春

◆宇田川トシ子（64歳）

昭和二十年に入り「警戒警報」「空襲警報」のサイレンが多くなり、寝られぬ夜が続きました。サイレンと共に電燈に黒い布をかけるか、消して床下の防空壕に入り身を潜めておりました。防空壕とは名ばかりで、畳をあげて床下に穴を掘り、すの子を引き、ござを敷き毛布にくるまって身を寄せ合い息をこらしておりました。そうっと雨戸を開けて縁側に出てみると隅田川の向う側が真赤に燃えて、真昼の様な明るさです。今夜はどこがやられたのか、ボウゼンと眺めているだけでした。下谷方面が焼けた時、江東方面が焼けた時、そちら方面に住んでいる友人、知人の顔が浮かび、皆さんの無事を願うのみでした。

当時私は北千住に住んでおりましたが、今でも記憶に生々しく忘れる事が出来ないのは南千住から日暮里方面が焼けた時でした。翌日出勤のため駅に行きましたが、電車は不通。駅員の話では日暮里まで行けば、山手線は走っていると言うので、皆で線路の上を歩く事にしました。皆黙々と荒川の鉄橋を渡り南千住に入り、一面の焼野原に愕然（がくぜん）としてしまいました。南千住は、小学生の頃五年間位住んでいた所ですので友人も多く、その人達の安否を気にかけながら歩いておりました。昔小塚原の刑場跡と言われる回向院のあたりに来た時線路の上に数人の焼死体がありました。うつぶせにうずくまりその背中の皮が真黒に焼けて風にパタパタしている様は目を被うばかりでした。赤ちゃんをかばうようにして死んでいる親子等……思わず手を合せて冥福を祈りながら歩いた時の有様は今でも脳裏に焼きついて忘れる事はないと思います。町の方に目を向けると、そこここに死体のあるのが見え、まだくすぶっている焼跡からは異様なにおいが漂って来ます。ハンカチで口を被いながら皆無言で歩いて行きました。

日暮里から山手線に乗り有楽町まで行き、会社に着いた時には昼になっておりました。会社の上司の方も、無事を喜んでくれると共に帰りの事を心配して「昼食を食べたら早く帰った方がよい」と言ってくれました。帰りは南千住まで電車が走り、線路上の焼死体は片付けてありました。隅田川の鉄

橋に不発弾があるらしいと言われ、橋は通行出来ないので町の中を歩いて千住大橋を渡る事にしました。途中何軒か友人の家のあった所を見ましたが、後かたもないのを見て、胸の痛む思いでした。家に帰り母達にその話をすると、「もし家も南千住にいたら、今頃はどうなっていただろうね」と涙を流しておりました。

その頃私達は通勤に着物を直して作ったモンペをはき、防空ズキンを背負って雑袋をさげて胸には名前、住所、血液型等を書いた布を縫いつけておりました。雑袋の中には、三角布、いり豆、梅干等々を入れていたものです。先日亡き母の写真を探しておりました折、当時の写真が出て来たら若い人達に「こんな恰好で通勤していたの」と笑われました。「贅沢は敵だ」と言われ、パーマも禁止、たもとの長い着物等着ていたら国賊だって言われたものだと話すと「へエー」と驚いていました。私達には華やかな青春はなかったと思います。

私のいた会社の屋上には高射砲隊が駐在していました。空襲になると皆いっせいに地下四階にあった道場に避難しました。階段を整然と並んで、地下室まで一気に駆け降りました。地下には自家発電室がありその奥には、貴賓室があるとかでホテルに泊っていた外国の高官が避難して来たのを見た事もありました。この会社は後にマッカーサー司令官が入った所で、終戦の時は四十八時間で立退くという事で、大変な思いで引越しをしたものです。今でも近くへ行くとその時の事が思い出されます。

もう一つ忘れられない事は終戦の日の事です。私の家の近所は八月十五日に立退きと決っておりましたが、「八月十五日に玉音放送がある」というので、それを聞いてからにしてくれと皆でがんばり一緒に聞いておりました。ラジオから流れてくる陛下のお声は低く沈痛でしたので、始めの内はよく理解出来ませんでしたが、どうも戦争に負けたらしい、そんなら家を壊させる事はないと壊すために来ていた人達を追い帰してしまいました。皆荷物は疎開させてしまって、家の中には父の生活用品だけでしたのでとりあえず、疎開先に行く事になりました。一日遅れていたら……と思うとホットするやら、急に力がぬけてしまいました。夜汽車にゆられながらこれからどうなって行くのか、不安だった事も思い出します。あの時こんな世の中になるとは誰も思わなかったと思います。今の幸せを大切にしていきたいと思います。

終戦の思い出の中から

◇梅田　義則（49歳）

「パパママ　ピカドンでハングリー　ハングリー」この言葉が、今も頭の中にこびりついているのは私だけなのかな？といつも思っている。「ピカドン」とは広島市に投下された原子爆弾のことである。原爆で両親を失なった子供が腹をすかせて路上をさまよっている時に発せられた言葉である。記憶がはっきりとしないが、広島の被災を主題にした映画で使用された言葉だったのかもしれないが第二次大戦後の中、当時我々小学生等の間にもよく使われていた。進駐軍専用の列車が三原方面から呉を経て広島方面へ毎日決まった時刻に呉線の列車に向かって投げつけていた言葉でもあった。

終戦を迎えたのは、山口県の光市である。広島生まれの父が光市で終戦を迎える事になったのは、戦時中に呉の海軍工廠に勤めていたのが、光市の海軍工廠へと転勤になったからであった。呉港では、日本で当時活躍した軍艦が多数造られていた。光市へ移った小生は当時三～四歳頃だった。

記憶に残っているのは今となっては、よく夜になると「空襲警報発令」と町内の人の声で家の窓にはカーテンをし、光が全く外へ漏れぬ様にして親子三人で（時おり父が夜勤のない時には四人で）近くの丘の横穴の防空壕へと走り込んだ事である。壕の中は大人の背より相当高く奥も広かった。飛行機の爆音もかすかに聞こえてくるし、闇夜の中の探照燈のまっすぐな光が交叉している様は、今も眼につく。

日本も負け戦に近づいた頃だったのだろうか。いつものように防空壕へ避難した。警報が解除となり、人々が壕の中から外へと出はじめたが、私は夜空がまっ赤になっていて父の背にかじりついてしまい地面へおりる事が出来なかった。

海軍工廠の方角がまっ黒い煙りと共にまるで上空が絵のように見えてきた。空一面黒や白、赤い色が映し出されていたのである。工廠がやられて焼け落ちていたのだろう。よくもあの場所をねらって爆弾を投下したものと思った。相当離れた中学校も全く全滅していた。

空襲の夜の想い出と焼け跡をかき分けながら歩いた事の記憶がよみがえってくる。この第二次大戦の終戦を境に、小学校の教科書を一変したし、何人かいっしょに教科書を共有も

した。ある時、小学校では、踏切にビー玉を使った信号のようなものが建てられるから壊さぬようにしなさいと注意された。進駐軍が日本にくるとも言われた。

こんな中で小学校四年には山口をあとに広島へと帰ってきた。

幼ない頃の第二次世界大戦だった。日本は四方を海に囲まれていて、陸地での国境という問題が今日までなかったから少なからず人と人との争いが少なかったのだろうか。

経済問題からも戦争が起こりうる。

平和とは何かを、今もこの宇宙の開かれつつある世界は問いかけている。人工衛星で地球の様子が手にとるほどわかっている今日である。港区からも広島へ平和青年団を原爆の日を中心に毎年送っている。我々いや私は、今何をすべきなのであろうか。

（港区教育史資料）

焼けあとの麻布十番で働いた私の戦後

◇岡野　君香（70歳）

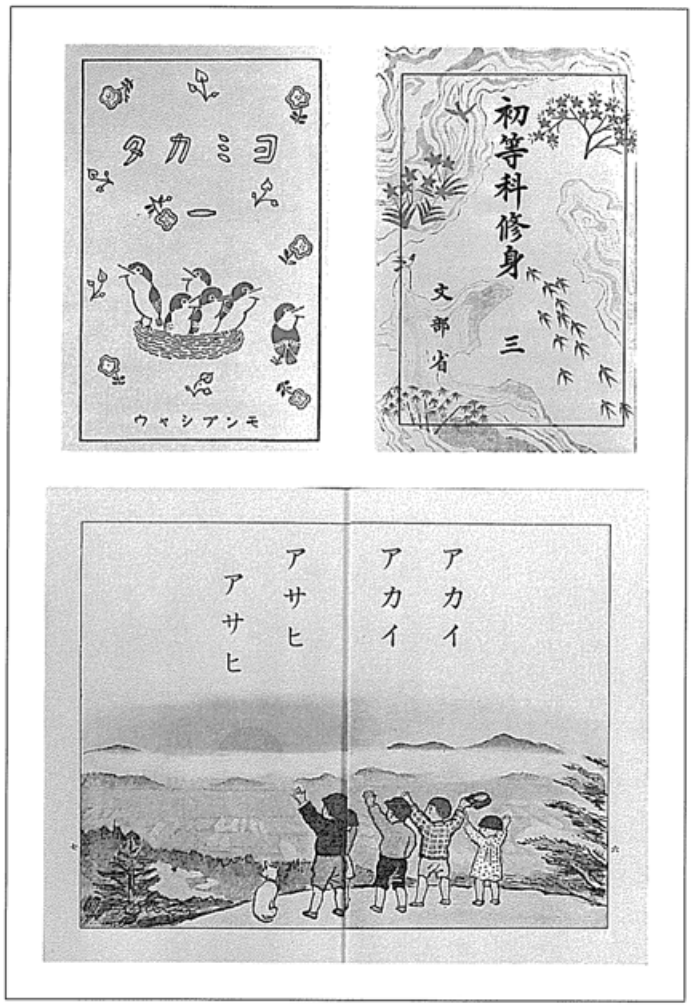
三月十日の大空襲で麻布十番が焼けました。その焼野原に追はぎが出たり、空襲で亡くなった人の幽霊が出て来るなんてデマが飛び、その頃一人あるきなんて出来ません。約半年近くたって終戦となって地方に疎開してた方々もボツボツと戻って来ました。その頃は現在とちがって庶民達は先の見とおしがつかないので、店に品物なんて少なく、就職難の時代です。年配者はもちろん、若い人にも仕事がありません。

私は戦争中に勤めてた軍需工場が解散になり、桜田町のジャム工場で募集してるとかで姉と二人して働かせて頂きました。苺（イチゴ）のヘタをとる仕事ですが、今は大きな苺が出てますが、その頃の苺は小さくて、五人ぐらい働いてました。ヘタをとりながらおしゃべりに花が咲き、とりながら「すこしなら食べなさい」と言われ、何も無い時ちょっと楽しみでした。すぐ一カ月ほどで解散になり、飯倉の方の町工場募集のビラを見て働き始めました。十番を通って飯倉に出るのですが、夏には盆踊りのやぐらもできて大分、活気が出て来ました。

焼けあとに麻袋の会社が出来て、朝鮮戦争が始まりかけて来たのでMPにおさめた砂糖袋をその会社である大きさに裁断しなおし穴のあいてるところを麻糸で修理して朝鮮戦争の現場で砂をつめて土のうにするとか、したがって上手下手無く、一枚いくらの手当で若い方も結構来てました。みんなで朝鮮戦争の手助けをしてるみたいと言いあいました。

この会社の奥様がとても良い方で、私は飯倉の方を五時頃までして、それからこの麻袋屋さんで、六時三十分頃までやりました。何しろ砂糖袋なので、虫にさされたりしましたが、学歴も何も関係なく待遇され、楽しい思い出です。

越の湯が元の所に出来た時は、何故かホットして心まであたたまるような気がしました。現在の十番はビルが多くなり、戦前の十番の面影もありません。



（港区教育史資料）

満洲での体験―毎日いろんな方法でにげた――

◆川崎キヨコ（69歳）

パンパンと空砲が響くと同時にトラックの四方からソ連兵が飛びおりる。朝まだきである。飛行機の油を製造するこの会社一つで学校・公会堂・公衆浴場・売店・飲食店すべてを経営しているここ旧満洲吉林江北町は松花江を隔てて吉林市内に通じている孤立した町。

社宅が階級ごとに孤をえがいていて道幅も広く遠くに小高い丘も見える。

また略奪だ。いち早く子を背負い、ソ連兵に連れて行かれるという噂を信じて夫を裏へ逃がし、玄関の戸を開けて覚悟して待つ。足早の靴音と共に一人の兵が入って来た。腕にはすでに二の腕からいくつもの時計が並んでいる。八月の暑い日の事である。私を見るとその腕を出して「時計を出せ」とゼスチャーする。私もゼスチャーで応じる。「この子が落して割ったので無い」と。そしてジリジリと後ずさりしながら後手で間の襖をあける。兵の目が襖に向けられた。開けたり閉めたりドアと違うからだろうか。そのすきに彼が来た方向のお隣りの家へ逃げた。何を奪って行ったのか思い出せないが追いかけては来なかった。こうした繰り返しが、朝、昼、晩の別なく幾組もなのだろう続いた。そうして段々手荒になっていった。電気釜で御飯をたきかけては途中で逃げた。食事するひまはほとんどなかった。夜は始めの内は隣組で一人、家の外れに立ち番したが、やはり我が家が可愛い。その内、各戸で立つようになり、私は腕にひもを結び窓の外にたらし、靴をはいたままの逃げじたくで子供を抱いて仮眠する。主人が紐を引く。急いでガラス戸の側に行き、小声で「ウラ？　表？」「表だ!!」小声で応じる。私は子供を抱いて裏へ逃げる。逃げる範囲の決められている裏の丘へ向う。四、五人の女性の声がする。前面に月のあかりで水が見える。防空壕に雨水がたまったのだろう。と、後からコツコツと長靴の音と懐中電灯が左右にゆれて近づいてくる。

私はとっさに胸をはだけ、子供をしっかりと、右手に抱え、乳房をふくませ、左手で土に爪を立てヅルヅルと水に足をすべらせた。水深も、命も念頭にない。ただ、敵兵の凌辱は受けたくない。フト足が何かにかかって止まった。左の

足で探る、細いが道のようなものが爪先立ち出来る程ある様に思えた。探りながら左の方へ長靴（チョーカ）の音とは反対の方向へ少しずつ少しずつ動く。早鐘（はやがね）のように打つコドウ。子供が泣いたら、の不安。どれだけの時間がすぎたか。カチカチという長靴の不気味な音が遠のいて行った。

土から爪が外れそうになる程、力が抜けた。だが下は深さのわからぬ水だ。そのままじっと立って待つ。どれ程の時間が過ぎたか。ふと男の声で奥さんの名を小声で呼んでいる。私は生き返った。「すみません、どなたか知りませんが、この手を引っぱり上げて下さいませんか」水の中からの声で相手の声も驚いてた。「ああ」声にもならないような返事と共に大きな手がのびてズルズルと引き上げてくれた。その時の子供の状態は記憶にない。お互い月の光りでチラリとしか見えない声に向って「どうもありがとうございました」「子供さんも一緒？」「ええまだ小さいものですから……。他（ほか）の奥さん達は子供連れでなかったようなので、この子が泣いて御迷惑をかけては、と私はここにとどまりました。皆さんはもっと奥へ逃げられたようですから、大丈夫と思いますよ」男の人に丁寧に御礼を言って、その方の「もう安心」の言葉に、それでも放心したようにしばらく、しゃがみ込んで家の方向に向かった。

子供の泣かなかった事を神に感謝している。毎日色々な方法をとって逃げのびた。ずいぶん経って逃避の連絡に出た今は亡き主人が言った。「女はとても外へは出られない。針金で吊るされて死んでいる人がいる」と日本人もむごい目にあったのだ。

戦争はどちらもむごい目に遇（あ）わされる。もう決して戦争や争い事はやめなくては。

皆仲よく暮らして行けないものだろうか。

これからの皆さんに「平和」の続く事をお祈りして私の体験をとじさせていただく。

学徒勤労動員

（港区教育史資料）

勤労動員の女学生

（港区教育史資料）

勤労動員

◇菅野　太内（60歳）

昭和二十年四月、この頃芝区新堀町の我家はまだ焼け残っており、私は中学三年生になりました。空襲はますます激しくなり、連合艦隊はどこへ行ったのか？戦況は不利になるばかりで、我々中学生も三年以上は勤労動員と称し、戦争遂行に協力することになりました。

最初に行ったのは四谷の水道局です。この頃は焼野原が多く、歩いて通いましたが、行って見て驚いたことは、内藤町あたりと、水道局（新宿御苑入口の前に区役所と並んでいた）の前方は、大本営（今の市ケ谷自衛隊駐屯地）がまる見えで一面焼野原でした。

家から金槌を持って来るようにいわれており、我々の仕事は、焼跡の鉛管から漏れている水を止めるため管をたたいてつぶすことでした。この仕事は一週間で終わらせました。

次は大森駅の貨車の荷役です。降ろす荷は米、麦、炭俵で、積み込むものは家庭の疎開の荷でした。米俵は六十キログラム以上あったはずなので担ぐことが出来ない者の方が多かったようにおぼえています。私はやっと担ぐことが出来た方です。指導員というか監督は、韓国の人で、休憩の時にハングル文字を教えてくれたりしましたが、短時間でしたし、おぼえるまではゆきません。昼食には豆粕（まめかす）とお米のおにぎり一個が特別支給されたのでお弁当は持たずに出ました。国電（省線？）は動いていましたから、私は田町から電車で通いましたが、いつも満員で、連結器の上に乗る人もいましたし、軍需工場へ行く人達でしょう、日の丸や神風とかかれた手拭を鉢巻きにして出てゆく人達もいました。車掌は女学生で、私達から見るとずい分お姉さんに見えたものです。ですから逆に彼女たちから見れば、弟のように思ったのか、こっそり車掌室に乗せてくれましたので、電車を待つ時は最後尾でした。一ケ月で五十円の手当が先生から支給され、一旦は親に渡すように言われましたが、その頃は物資不足で、学用品や靴、服等も不自由しており、帽子の校章も木で出来て古くなると端がかけて来るような物でしたし、本屋にもほとんど参考書、辞書などもなく、学校から辞書の割り当てがあり、それもわずかで、抽せんで買うような状態でしたから、

親が「自分で使いなさい」といってくれても買う物がなかったのが実状で、そのまま親に渡しました。

大森駅周辺もそのうち空襲で焼けてしまい、次は大船にある海軍工廠に行くことが決まりました。このころには地方の高学年女学生も、軍需工場に来ており、私の従姉弟も新子安の寮に来ていて、食事も不足しているらしく、たまに我が家へ来て、こぼしておりましたが、一度だけこの時はお米だけのおにぎりを母が作り、私が荷物にみせかけこっそり届けたことがあります。同室の人にあげられる量は、とても用意出来る時勢ではなかったので、やむを得ないことでした。

そのうち、五月二十六日に我が家も焼け、私は大船の海軍工廠に行きたかったのですが、父がゆるしてくれず、あくる日学校に行ってみると、それでも校庭には大勢生徒が集まっていて、学校も体育館および教室が焼けており、かろうじて教員室、講堂、図書館が残っていました。私は先生に親がゆるしてくれないので、やむをえず福島の父の実家に一時疎開するむね申告して、学校を後にしました。

罹災証明書というのが出まして、汽車の切符は優先されますが、それでも満員でやっと福島へたどり着き、母方の親戚からも毛布等をいただいて父の実家に落ち着くことが出来ました。農作業を手伝いながら同級生はどうしているか、早く大船海軍工廠に出頭したかったのですが、父がどうしてもいかせてくれず、福島で終戦を迎えることになり、中三終了後まもなく単身上京し、母・妹・弟（父は昭和二十五年病死）を迎えるべく必死で働きましたので、とうとう大船海軍工廠へ何名いってどんな作業をしたのか、いまになっては知るすべもありません。

私の父は福島の農家の出でしたが、三男ですから早くから東京に出て来ており、私は芝区新桜田町一九番地で生まれ、小学校は南桜に入学し、桜の紋に南の字の入ったランドセルを学校から貰いました。二年生になる時、家庭の事情で、芝、新堀町に移り芝小学校に転校したわけです。ですから港区に対する愛着は非常に強く、空襲が激しくなってからは、敗戦は覚悟していましたし、伝単（米軍がまいた宣撫用ビラ）を父が読んで「アメリカのいっている方が正しい」といっていましたが、米軍が上陸しても骨は港区に埋めたいと思っていました。

幸い、現在港区に住むことが出来、今の生活に感謝すると共に、これからはグローバルにものごとを考え、平和な時代が末永く続くことを祈ります。

病院で働いて

◆五味　澄子（66歳）

昭和十六年十二月八日、宣戦布告の日は私が専門学校に入って最初の定期試験の日であった。昭和十九年九月に繰上げ卒業によって学校を出るまでに戦局は次第に悪化して行った。最終学年には授業に出た記憶はほとんどなく、夏休みも返上して工場勤務をした。卒業に当たり、恩師の一人が、この非常時下には看護の知識が必要であると説いて、聖ルカ病院に行く道を開いて下さった。こうして就職とも勤労作業とも学習ともつかぬ形で、約十名の同期生が十月から聖ルカ病院に行くことになったのである。

病院も手不足であったのか、何の経験もない我々を即日病室勤務に配置し、時間を繰合わせて一般看護法の学習と、付属看護学校生徒の授業の聴講を許して下さった。

どうにか病院勤務になれた十月下旬のある午後、突然敵機一機が偵察に来襲した。これにより一人の被害者が運び込まれた。日本側の射った高射砲が敵機のはるか下で炸裂し、破片が銀座の裏通りに落下した。それは四階建てのビルの屋上を貫き階下で商談をしていたうちの一人に当たったということである。この人は左大腿部から下を切断する手術を受けたが、あとから続々と発生した犠牲からみれば軽症というべきであったろう。

病院ではいつでも患者を地下に避難させられるような訓練が繰返し行われた。恐ろしかったのは次の一月末の空襲である。冬の午後銀座、数寄屋橋方面の空が真黒に煙る空襲があった。大規模な空襲の最初であったかもしれない。空襲警報が解除されると間もなく、院内の医師と看護婦の動きが慌ただしくなり急救患者の収容が察知された。手の施しようもない人、傷の手当てだけで即刻帰された人さまざまいたが、結局全身にガラス片を浴びた女性一人が長期に入院したに止どまった。

三月十日は夜襲だった。麻布の我が家から下町一帯の空が赤く染まって、被害の大きさに察しがついた。いつもと出勤コースをかえ市電に青山一丁目まで乗り地下鉄で銀座に出た。地下鉄の階段を上って四丁目の角に立つと私の目に映じたものは、三越といまの和光の外構が残り、あたり一面の焼

野原だった。焼けかすの遙か向こうに聖ルカが無事らしい姿を見せていた。市電は、レールは焼け落ちた土くれと木塊で埋まり電線は垂れ下がっていて不通である。はやる心を抑えて築地へと歩き始めた。前方から来て通り過ぎて行く人々の群は、いずれも顔は煤で黒く光り着衣はずたずた、手に僅かの物を下げ、力なくくち無表情に互いに寄り添って黙々と歩いて行った。

病院に着くと玄関に大きな貼紙が出ており収容患者の氏名または転出先が記されていた。その量は忘れたが一見して数え切れるものではない。人々は喰い入るように見詰め肩を落として立ち去るばかりだった。

病院内は全館停電していた。当日私は六階の小児科勤務だったので駆け上がって行った。子供たちの何事もなかったような表情で私は一先ずほっとした。そこへ家が焼けて故郷へ帰るので子供を連れて行く、と病児を迎えに来た母親が現れた。紀年君（紀元二千六百年生まれの子に多い名だった）という可愛い利発な子供だったが、どこまで生きのびただろうか。

いつもは鎖が張ってあって登れない屋上塔の階段だが、秘かに塔の上まで行ってみた。周囲を眺めると銀座から墨田、足立、荒川方面にかけて見渡す限りがただ焼け原で、所々にぽつぽつとビルの残骸があるに過ぎない。呆然として涙すら出ない。どうして無辜の市民がこの苦しみに遭わねばならないのか。この人々は今夜からどうするのだろう。もう戦争はいやだ。どうしたら、どういう状態で終結するのか。一夜にこれだけの多くの家と人を失う惨事を何回繰返すのか、何のために戦っているのか等々、様々な思いが湧いては消えていった。

一日中停電だったため、水も食事も薬剤も一々一階まで取りに降りなければならない。途中、平常特別病室として余り使われることのない二階が騒がしいのでのぞいてみた。ふだん人の動きのない廊下の両側に担架のまま人が並べて寝かされ、人の声とも思えぬ呻き声があちこちから聞こえた。私は正視できずに上階へ走った。翌々日までにこの廊下はもとの静けさを取戻した。あの負傷者らはどこに収容されたかきけずじまいになった。

この空襲があってから、当時六十歳以上の者は疎開勧告を受けていたので、それに該当する両親は信州に行くことを決めた。私一人をおいて行けないと言い張られ私も病院を辞めた。しかし病院で出会った罹災者の表情を私はいつまでも忘れることができなかった。

昭和六十年春、銀座空襲四十年目に関する新聞記事の中に、全身にガラス片がつきささって五階に入院中だったのが泰明小学校の中居先生だったこと、そしてご存命であることを知った。新聞社を介して再会を許されたことは、せめてもの救いであった。

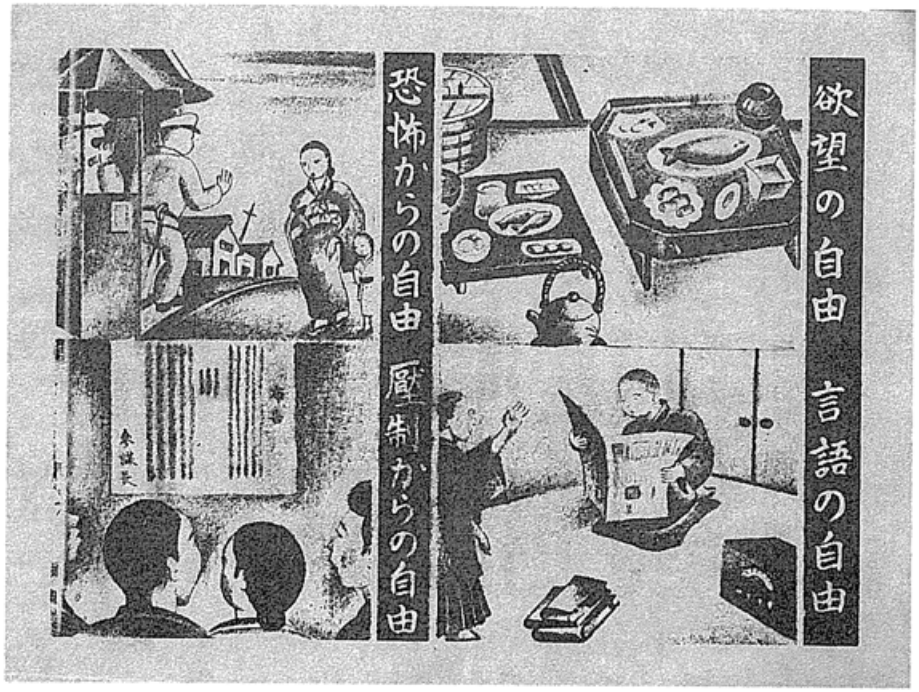
嬉しかった玉音放送

◇坂井　かね（77歳）

私の家は、田町駅に近い鉄道のすぐ側でした。家族は父が私たちの小さい頃病死したので、母が五人の子どもを育ててきました。戦争が激しくなるにつれて、三人の弟や姉の夫と次々と兵隊に徴集され、東京空襲のときには母と姉と私の三人だけで何ともこころ細いありさまでした。毎日のように今の第一京浜の道を、若くて凛しい兵隊さんが戦地へ赴いていくのを、家族みんなで手をふって見送ったのを覚えています。芝浦から船で、どこへ行くともわかりませんでしたが、必ず戻ってきてほしいと願わずにはいられませんでした。あの若い人たちは二度と故国の土を踏むことがなかったのではないかと思います。私の二番目の弟は、中国の北部へ行って戦死しました。隊長さんがわざわざ来てくださって「戦争に負けたくない、家族を惨めな思いにさせたくない」と、弟が死ぬ前に言っていたことを伝えてくれました。

空襲では、本当につらい思いをしました。飛行機が屋根をすれすれにかすめていくときは震え上がりました。B29は焼夷弾やらガソリンのようなものをバラまいて飛び去っていき、その後は火の海でした。それが昼と夜の区別もなく続きました。熱くて熱くて、水をいくら体にかけてもすぐかわいてしまい、どうしようもありませんでした。防空壕に入っていても恐くてしかたがありませんでした。芝公園に避難したときは、かえってそっちの方面がひどくて、もうこれで死ぬのではないかと思ったほどでした。明け方帰ってきた時には、家はすっかり焼き払われどこかもわからないほどで、しばらくは防空壕の中で生活をしました。近所の人は何人か焼死し、私たち家族はよく生きていたとつくづく思いました。

天皇陛下の声をラジオで聞いたときは、本当にこれで戦争が終わったと思い、涙がでるほど嬉しかった。戦争が終わればもうこんなひどい目にあわなくてすむと思ったからです。今の小さな子どもたちをみると本当に幸せそうです。それだけに、二度と戦争があってほしくない。この子らをあの時のような目にあわせてほしくないとつくづく思います。



NO 2007

日本國民は次の自由(私權)を
享有すべきである。
一、欲望の自由
一、恐怖からの自由
一、言語の自由
一、壓制からの自由
右の自由を得る道は唯一つ
ある。
この戰爭を惹起した軍閥
を除去し自由國民の仲間
入りをし給へ。

(提供：堀利晃さん)